

シャハイナ・グローリーの諸相 (4)

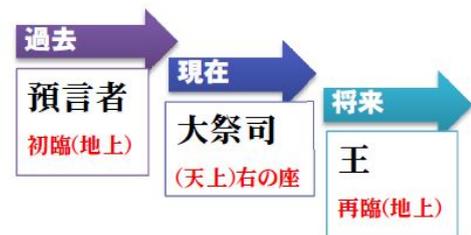
【聖書箇所】ゼカリヤ書 14 章 4 節、7 節

ベレーシート

●「シャハイナ・グローリーの諸相」としての第一は、神がホレブ山の麓で、「燃え尽きない柴」の中に現われました。それは神がご自分の民をエジプトの地から救い出すためにモーセを召し出した場面です。第二は、神と神の民が共に住むための象徴としての「幕屋」が建造されたときに、神の栄光の雲がその幕屋をおおうという形で現わされました。その幕屋には昼は雲の柱、夜は火の柱として主の臨在が現わされ、神の民を導かれました。後のソロモン時代に移動式の幕屋から固定式の神殿へと変化しますが、その本質は同じです。第三は、やがてその幕屋(神殿)における主の臨在が「**人となったイエシュア**」に現わされます。このイエシュアこそ旧約が預言した「**メシア**」です。「メシア」とは神の永遠のご計画の実現のための特別な務めのために油注がれた者であり、その特別な務めは、「預言者」「祭司」「王」に限られていました。イエシュアはこの三つの務めを果たすために神から遣わされたのですが、最後の「王」としての務めはこれから実現することなのです。

●初臨におけるイエシュアの働きは「**預言者**」として、当時、歪められていた神の教え(トラー)を正して、本来の神の教えを説くと同時に、旧約の預言者たちが預言してきた「その日」に実現する御国の福音についても教え、その御国の祝福をデモンストレーションしました。この御国を実現するための神のご計画は、人々の罪の贖いのためにメシアが苦しみを受けなければならないというものでした。イエシュアの十字架の死はまさにその「**受難のメシア**」の姿です。しかしこのことは、当時の人々(弟子たちも含めて)には理解しがたいことであったのです。それは「メシア」に対する既成のイメージがあり、「**受難のメシア**」はそのイメージに当てはまらなかったために受け入れられることなく、拒絶されたのです。それが「**受難のメシア**」です。しかしその「**受難のメシア**」が三日目に死からよみがえり、天に昇り、神の右の座に着かれて「**大祭司**」としての務めをなしておられます。やがて、イエシュアは栄光の

「**王**」として再びこの地上に來られて(=再臨)、「**メシア的王国**」(=千年王国)を樹立されます。そのときメシア王国の中心であるエルサレム(特に、神殿)において、シャハイナ・グローリーが現わされるのです。このシャハイナ・グローリーが、千年王国のあらゆる領域において神の祝福の総称としての「**シャーローム**」をもたらすのです。



●このメシア的王国の到来を、旧約の預言者たちは「見よ。その日が来る」というフレーズで預言しています。「**その日**」と訳されたヘブル語は「**וַיְהִי־יְמֵי־הַהוֹשִׁיעַ**」(וַיְהִי־יְמֵי־הַהוֹשִׁיעַ)で、正確には「**その日に**」という意味です。ギリシア語の「**カイロス**」のように、終わりの日に起こる定められた時を意味しており、その定められた時とは、この地上における目に見える形での「**メシア王国の到来**」を意味しています。「その

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

日」には、メシアは全世界の王の王として統治され、また主の主としてすべての国民からあがめられ、礼拝されます(黙示 19:16)。旧約ではこの「その日」という表現がなんと 338 回も使われているのです。

●**千年王国について知るためには、旧約の預言を正しく理解する必要があります。**聖書の預言を私的解釈して、自分の都合の良いように用いるとすれば、神との正しいかかわりは損なわれ、神のご計画を知らない者となってしまっただけでなく、光ではなく、やみの中にいる者と変わらないことになってしまいます。「やみの中を歩む者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」(ヨハネ 12:35~36)と言われたイエシュアのことばを思い起こすべきです。「光を信じる」とは、神の永遠のご計画であり、神のみこころであり、神の御旨とその目的を知ってそのことを信じることです。そこには神の知恵があり、この世の知恵をもってしてはだれも悟ることのできない事柄です。もし、メシア的王国(千年王国)がないとしたなら、神が預言者たちを通して約束された事柄は実現しないということになります。また、アブラハムに対して語られた神の約束も実現されないことになります。そのようなことは決してありません。神の約束は必ず成就すると信じるのが、聖書の信仰です。

1. その日、主の足はオリーブ山の上に立つ

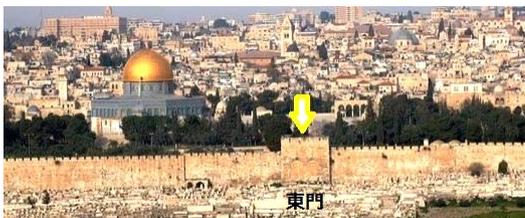
【新改訳改訂第3版】ゼカリヤ書 14章4節

その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。

●「主の足」とあることから、主の顕現が可視的な、しかも朽ちることのない肉体を伴う顕現であることが決定的に明らかになります。

【新改訳改訂第3版】エゼキエル書 43章1~5節

- 1 彼は私を東向きの方に連れて行った。
- 2 すると、イスラエルの神の栄光が東のほうから現れた。その音は大水のとどろきのものであって、地はその栄光で輝いた。
- 3 私が見た幻の様子は、私がかつてこの町を滅ぼすために来たときに見た幻のようであり、またその幻は、かつて私がケバル川のほとりで見た幻のようでもあった。それで、私はひれ伏した。
- 4 **【主】の栄光が東向きの方を通過して宮に入ってきた。**
- 5 霊は私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。なんと、【主】の栄光は神殿に満ちていた。



東門拡大

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●メシアが天から降り立たれる場所は、かつてイエシュアが昇天されたエルサレムの東に面するオリーブ山です(使徒 1:10~12)。エゼキエルによれば、オリーブ山はかつてソロモン神殿において現わされたシャハイナ・グローリーが神殿から離れ去っていく方向にある山であり、やがて再びエルサレムの神殿にシャハイナ・グローリーが戻って来る山でもあるのです(エゼキエル 43:2)。「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ」とあるように、メシアが天から降り立たれる場所と神の栄光が戻ってくる場所が同じなのです。そして、千年王国はエルサレムの東の門が開かれて、その門を通して主の栄光が入って来ることから始まります。それゆえ、詩篇 24 篇では次のように預言されています。

【新改訳改訂第3版】詩篇 24 篇 7~10 節

7 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。

8 栄光の王とは、だれか。強く、力ある【主】。戦いに力ある【主】。

9 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。

10 その栄光の王とはだれか。万軍の【主】。これぞ、栄光の王。 セラ

●ちなみに、この詩篇は「あなたの心を開けば、栄光の王があなたの中に入って来られる」というメッセージをもった詩篇ではありません。それは置換神学の解釈です。詩篇 24 篇 7 節の「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」とは、この詩篇は人の同意を得ることなく、再臨の主が全世界を治めるために、エルサレムの東門から入って来られることを預言しているのです。この時には、主の周囲にはすべて主に従う者たちがいるゆえに、人の同意は全く必要ないのです。ちなみに、写真で見られるように、現在、この東の門は封じられています。

●千年王国ではなんとといってもエルサレムの神殿が中心です。そしてそのところからメシアは王として世界を治められます。そこはメシア的王国におけるセンターであり、最も聖なる場所となるのです。千年王国における「神殿」については、エゼキエル書の 40 章 1 節から 47 章 12 節に詳しく記されています。それについてはここでは扱いません。「牧師の書斎」で学んでください。

2. 千年王国は人が想像し得ないような世界

●王なるメシアの地上再臨によってもたらされる千年王国は人が想像し得ないような世界です。メシア再臨の前後には多くの不思議な出来事が数多く起こります。それについては、拙著の「キリストの再臨と終末の預言」の 21~83 頁で記しています。しかし今回は、エルサレムを中心に現わされたシャハイナ・グローリーについて取り扱いたいと思います。まずは、あまり注目されない箇所かもしれませんが、ゼカリヤ書 14 章 7 節に記されていることを取り上げます。

(1) 昼もなく、夜もない、長い連続した「ただ一つの日」がある

【新改訳改訂第3版】ゼカリヤ書 14章7節

これはただ一つの日であって、これは【主】に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。

●主が再臨され、地上の神殿に着座されてからのことだと考えられますが、「夕暮れ時に、光がある」(ゼカリヤ 14:7)とあるように、昼もなければ夜もない、日の出も日没もない超自然的な「ただ一つの日」(「ヨーム・エハッド」**יְוֹם־אֶחָד**)が到来します。口語訳はこの日を「長い連続した日」と訳しています。昼もなく、夜もないという実に不思議な日ですが、これまでのシャハイナ・グローリーのことを考えるならば、決して驚くべきことではありません。モーセが見た「燃えているのに燃え尽きない柴」、荒野で幕屋の上にあり、神の民を導いた「雲の柱、火の柱」。そして前回の「山上の変貌」におけるシャハイナ・グローリーを思い起こしていただければ、決して不思議なことではありません。というのは、そのとき三人の弟子たちは「御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった」主の姿を目の当たりにしました(マタイ 17:2)。これが本来の御子の栄光の姿です。つまり、神の本性の輝きがイエシュアの肉体を突き抜けてありのままに現われた出来事であり、顔が太陽のように輝いているのですから、弟子たちはまともに見ることはできなかったはず。その方が地上のエルサレムに来られたならばどうでしょうか。そこに主の栄光に輝く姿を見ることができるとは思えません。弟子たちが山上の変貌時に「光輝く雲」に包まれて、その中から御父の声を聞いたように、地上再臨されたメシアが支配する中心地においても光り輝く雲が覆うことは十分に考えられます。したがって、メシアが王として臨在されるエルサレムにおいては、「昼も夜もない、ただ一つの日」があっても決して不思議ではありません。

●ただ異なる点は、主の御衣が山上の変貌時には光のように白かったのですが、地上再臨時には「血に染まった衣を着て」いることです(黙示録 19:13)。ですから、その方がイエシュアだと明確に分かるはず。そしてそこにはすでに「朽ちないからだ」を与えられている聖徒たちがおり、その聖徒たちはたとえ御顔が太陽のように輝いていたとしても見ることができると考えられます。しかし千年王国には朽ちないからだを持たずに入る者たちもいるので、その者たちには見えるのかどうかは分かりません。いずれにしても最終段階である永遠の御国においては、すべての神のしもべは「神の御顔を仰ぎ見る」とあります(黙示録 22:4)。アダムとエバが罪を犯した後で、彼らは「神である主の御顔を避けて」(創世記 3:8)とありますから、罪を犯す前には、彼らは主の御顔を見ることができたのです。そのことが救いの究極において回復されるのです。



●少々脱線しましたので、ここで話を元に戻しましょう。ゼカリヤ書 14章7節の「これはただ一つの日であって、これは【主】に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。」という不思議な箇所にある「これは【主】に知られている」とはどういうことでしょうか。新共同訳はこの部分を「その日は、主のみ知られている」と訳しています。おそらくその意味は、「主にとっては当然のことであっても、人には知ろうとしても知り得ない、理解しがたい事柄」といった意味ではないかと推察します。文脈的に考えるな

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

らば、ここで言及されているのは**エルサレム**です。とすれば、全世界がそうなるのではなく、メシアが統治される神殿のあるエルサレムの付近だけは「昼もなく夜もない、夕べにも光がある」という不思議なシャハイナ・グローリーが現われると考えられるのです。

●今日のテゼ共同体で出版されている『来てください。沈むことのない光』(初期キリスト者のことば)という本があります。初期のキリスト者は「沈むことのない光」であるメシアを待ち望んでいたことがわかります。つまり、メシアの再臨による王国の到来は、神の臨在の光に包まれる時代として描写されているのです。メシアによって到来する千年王国のシャハイナ・グローリーは、まさに、「光」(「オール」 אור)である永遠の神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的が、エルサレムにおいて実現したことの現われなのです。

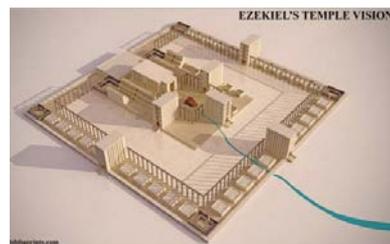
●メシア的王国におけるシャハイナ・グローリーは、自然界にもその影響を及ぼすようになります。地の呪いは解け、地には多くの産物が生じます。「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる」(イザヤ 35:1)のです。しかも、すでにメシアが初臨の時にデモンストレーションされたように、「そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者はあけられる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。焼けた地は沢となり、潤いのない地は水のわく所」(同、35:5~7)となるのです。いわば、かつてのエデンの園が回復された祝福と言えます。

(2) 神殿から流れ出るいのちの水はすべてのものを生かす

●イスラエルの地は乾季には全く雨が降らないのですが、メシア王国の時代には、人々はもはや水の心配をする必要がなくなります。以下のゼカリヤ書 14 章 8 節の預言も想像を越えた世界です。

【新改訳改訂第3版】ゼカリヤ書 14 章 8 節

その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、
その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ、
夏にも冬にも、それは流れる。



●メシア王国が到来する前に、エルサレムは地震による地殻変動によって最も高い山となります。そのエルサレムの神殿(=第四神殿)の敷居から流れ出るいのちの水については、エゼキエルも 47 章で預言しています。この水は生ける水の源である神ご自身から湧き出るいのちの水です。この水が流れ出るところでは、すべてのものが生かされるのです。エゼキエル書 47 章によれば、このいのちの水は東に向かって流れて死海に入り、多くの種類の魚が住むようになると預言されています。ゼカリヤ書では、この水は西の地中海にも注がれることが記されています。そして、夏と冬の区別なく流れ出るのです。夏の日照りや、雨とも関係がなく、絶えることなく流れ続けるのです。それは暗やみが追放されているひとつの現われと見ることができます。

(3) 主のみ教えがエルサレムから流れ出る

●いのちの水がエルサレムの神殿から流れ出るだけでなく、イザヤ書によれば、主のみおしえがシオン(エルサレム)から流れ出るのであります。これもシャハイナ・グローリーの現われです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 2章 2～5節

- 2 終わりの日に、【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。
- 3 多くの民が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、**シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のことばが出る**からだ。
- 4 主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。
- 5 来たれ。ヤコブの家よ。私たちも【主】の光に歩もう。

●旧約の預言者たちは、「終わりの日に」(「ベアハリート・ハッヤーム」 בְּאַחֲרֵית הַיָּמִים)、すべての国々がヤコブの神を真の神と認めてエルサレムに流れて来る終末の時代が来ることを確信していました。エルサレムは神のご計画におけるきわめて重要な中心地だからです。千年王国では、主のみおしえを求めて、「すべての国々がそこに流れて来る」ことが預言されています。そのことによって、ヤコブの家も異邦人の主にある者たちも、「主の光に歩む」ようになるのです(同、5節)。「主の光に歩む」とは、神のご計画とそのみこころに従い、主の御旨と目的にふさわしく歩むことを意味しています。

●また、千年王国では朽ちないからだが与えられることによって、神のみおしえを行う力が与えられます。山上の垂訓と言われている主のみおしえ(真のトーラー)がメシア的王国の憲章となります。このことは、エレミヤを通して預言された「新しい契約」が実現されたことを意味します。そこでは神の律法が人々の心の中に記され、「主を知れ」と言って互いに教えることがなくなります。なぜなら、すべての人が主を知るようになるからです。神のすべての祝福は、エルサレムにいる王であるメシアから流れ出て、すべてのものが生かされ、すべてのものが神の恩寵によって楽しみ、喜ぶようになるのです。

(4) 主の名とエルサレムの呼び方が変えられる

●その日には、「【主】はただひとり、御名もただ一つとなる。」(ゼカリヤ 14:9)のです。つまり、御名が「唯一の御名」となり、メシア王国にいる者は、こぞって「唯一の御名」を意味する「**シエモ・エハド**」(שֵׁמוֹ יְהוָה)と呼んで礼拝するようになることをゼカリヤは預言しています。ちなみに現在は、メシアは「イエシュアの御名(イエスの御名、The Name of Jesus)」と呼ばれています(復活後から今日まで)。千年王国において「シエモ・エハド」を礼拝する者は、全世界から呼び集められたイスラエルの「残りの民」と、「キリストの花嫁」である教会のメンバー、つまり、教会が携拳されるまでにイエシュアをメシアと信じたユダヤ人たちと異邦人クリスチャンたちです。彼らは、仮庵の時期に、エルサレムでメシアを礼拝するために集まってくるのです。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●エゼキエルは、メシア王国の中心となるエルサレムの名前が「主はそこに」を意味する「アドナイ・シャーンマー」(יהוה אֲדֹנָי)と呼ばれるようになると預言しています。メシアの名前も、エルサレムの名前も、千年王国では上記のように変えられるのです。このように呼び名が変えられるということは、神のご計画における新たな段階を迎えたことを意味するのです。神のご計画は必ず実現すると信じる者は幸いです。「天の御国」「神の国」、すなわちメシア的王国(=千年王国)は、旧約の預言者たち、およびイエシュアが語られたことが実際に実現する時代であり、メシアの地上再臨によって実現する世界です。その世界を待ち望むことによって、大きな希望を抱いて今を生きる事ができると信じます。ですから、以下のイエシュアのことばを心に刻みたいと思います。

「・・・あなたがたは、**光のある間に歩きなさい**。やみの中を歩む者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに**光がある間に**、光の子どもとなるために、**光を信じなさい**。」(ヨハネ 12:35~36)

2016.1.10